# 狛江の話題づくりやにぎわいの創出にも取り組みたいです

**狛江市商工会は市内の商工業者をサポートすることを目的とした経済団体で、企業に対して経営面などでさまざまな支援を行っている。また、商店主などが暮らしに役立つ情報を伝授する「狛江のまちゼミ」を13日㊏から11月10日㊏まで開催するなど、まちの活性化に向けたイベントにも力を注いでいる。ことし5月に7代目の会長に就任した佐藤高志さん（69）に話を聴いた。**

この人と　狛江市商工会会長　佐藤（さとう）　高志（たかし）さん

「亡くなった父の代からの会員で、工業部会に所属しています。平成27年から副会長を一期務めましたが、栗山昇前会長ら多くの先輩役員から『役員の若返りのために』と熱心に勧められたため、会長を引き受ける決心をしました」

「商工会は市内の事業者の経営相談、経理処理、融資斡旋などを行っており、企業の健全な発展によって地域の振興に貢献しています。会長の仕事は、事業計画を立てて推進したり、地域の商工業の振興について狛江市や東京都などの行政と連携するなど、総合的なまとめ役を務めることです」

「経済センサスなどの統計によると、市内には約1,900の事業主がいますが、商工会の会員は商業部会580、工業部会300弱で、組織率は5割弱です。全国的に事業主の高齢化と後継者不足で廃業するケースがみられ、これは狛江にも当てはまります。ただ、加入が減少傾向にあるなかで、最近は飲食などで若い人の起業が増え、開業相談などをした事業者の加入がみられるのは心強いです。商工会の青年部会も部員が増え、狛江駅前の清掃活動を始めるなど、新しい活動の芽が育とうとしています」

「商工会には商業と工業の部会がありますが、現在では美容やマッサージなどサービス業が増えています。また、マンションなどの部屋でパソコンを使って直接地域と結びつかない事業を始める人も少なくありません。そうした事業主にも入会してもらい、商工会を地域の振興に寄与できる組織にしていくために、時代に合わせて改革していく必要性を感じています。また、会員向けの研修会などのほか、市民に市内の店の情報を伝え、利用してもらうためのきっかけづくりも必要です。今後は他の組織とタイアップして、オリジナルブランド品を作るなど、狛江の話題づくりやにぎわいの創出にも取り組みたいです」

**佐藤高志さんの横顔**＝両親の出身地・新潟県古志郡山古志村（現長岡市）で生まれ、幼児期を藤沢市で過ごす。昭和26年に狛江へ転居し、その後父が信和工務店を開業した。隣接する世田谷区立小・中学校に通い都立千歳高等学校を経て日本大学理工学部建築学科へ進んだ。卒業後、設計事務所に4年間勤めた後、実家の工務店に入社。58年に父の死去に伴い社長に就任。狛江青年会議所、東京たまがわロータリークラブ、狛江第三小学校PTA会長、岩戸八幡神社役員などさまざまな地域活動を行っている。妻と子どもの4人暮らし。趣味は小学生時代以来ボーイスカウトに入っていた関係でキャンプ、サイクリング、釣りなどの野外活動と写真撮影。早朝に砧公園で撮影した植物などの写真をフェイスブックに投稿している。友人や家族とのお酒でリフレッシュする。

## カーリシルタ合唱団 美しい歌声を披露

フィンランドのカーリシルタ合唱団の来日記念交流コンサートが9月11日㊋に西野川4丁目のこまえ正吉苑二番館で催された。

6人の団員は「フィンランドの賛美歌」や「赤と青の薔薇（ばら）の花」などフィンランドの曲のほか日本語で「赤とんぼ」「ふるさと」など9曲を披露、会場を埋めた約80人の聴衆は美しい歌声に聴き入っていた。市内在住の音楽家などによる箏やピアノ演奏、琉球舞踊も行われ、フィナーレには箏と一緒に「上を向いて歩こう」などを歌って交流を深めた。

障がい者のカルチャースクールがあるカーリシルタ協会を訪問し、交流を深めた一般社団法人フィギャーノート普及会Happy Museの松田真奈美代表が、来年の日本とフィンランドの外交関係樹立100周年のプレイベントとして企画、音楽の街―狛江 エコルマ企画委員会などの協力で催したもの。

歌声を披露するカーリシルタ合唱団

同合唱団は狛江のほか、以前から交流している北海道江差町の障がい者施設あすなろ学園でコンサートを開く予定だった。しかし、6日㊍に起きた北海道胆振東部地震で現地を訪問できなかったため、狛江のコンサートが来日して唯一の公演となった。

団員たちは、以前から念願だった東京での初コンサートが実現して喜んでいた。アンナ・プラネンさんら団員は「ここで演奏できてほんとうにうれしい。みんなで気持ちよく歌えました」と笑顔で語っていた。

## 聴覚障がい者のカフェ 交流と活動の拠点に

聴覚障がい者のためのカフェが9月8日㊏に和泉本町1-25-5シャテロF102にオープンした。

聴覚障がい者の支援と当事者や支援者が協働で学ぶ活動をしている「ハンズ・プレイス」（竹林伸子代表）が聴覚障がい者の交流と活動の拠点として運営するもので、午前11時30分から午後5時まで営業する。収容人数は15人で、聴覚障がい者だけでなくだれでも利用でき、車イスやベビーカーでも入れる。コーヒー、紅茶、抹茶、中国茶とデザートなどを提供するほか、午後2時まではワンプレートランチをワンコイン（500円）で提供する。市内産のブランド野菜や国産の安心安全な食材を使うという。

聴覚障がい者のカフェ

竹林さんが店長を務め、ハンズ・プレイスの当事者、手話や要約筆記のできる会員約15人が交代でスタッフを担当する。聴覚障がい者のデイサービスを月1回開くほか、土曜日に65歳以上を対象に、手話のできる講師を招いて健康体操を催している。また、店内に聴覚障がい者が作った袋物やコースターなどの手作り品を展示、将来は手芸などのワークショップを開いたり、作品販売も行う予定だ。

オープンの日に参加した聴覚障がい者は「手話で歓談できる場ができて心強い」「街中にくつろげる場ができて、外出が楽しみになりました」と喜んでいた。

問い合わせ☎・FAX6326-0175ハンズ・プレイスカフェ。

## 障がいのハンデ越えて 27日にふれあい運動会

東京狛江ロータリークラブが第3回ふれあい運動会を27日㊏午前10時～午後3時30分に市民総合体育館で催す。

普段家に閉じこもりがちな障がい者のために、健常者とふれあい、体を動かして楽しんでもらうため催すミニ運動会で、明治大学と成城大学のボランティア部の学生も協力する。

市民の参加は自由で室内履きを持参。

問い合わせ☎3488-4317東京狛江ロータリークラブ。

## 東野川郵便局が50周年 狛江で3番目に開局

狛江東野川郵便局（東野川3-6-5）が開局50周年を迎えた。

同局はまだ狛江町だった昭和43年4月1日に狛江小足立郵便局として開局。狛江駅前郵便局、中和泉郵便局についで狛江で3番目に古い。住居表示などに伴い58年に現在の名称になった。同局の口岩洋伸局長は「半世紀にわたり郵便、保険、金融を行う町の郵便局として親しまれてきました。これからも地域に役立つ場所にしたい」と話している。

同局では23日㊋～29日㊊午前9時～午後5時にお客様感謝デーとして先着200人に記念品をプレゼントする。

問い合わせ☎3489-4431狛江東野川郵便局。

## キャンドルナイト灯と人 11月3日夜に多摩川で

「多摩川キャンドルナイト灯と人」（灯と人実行委員会主催）が11月3日㊏（雨天中止）午後4時45分～8時30分に小田急線鉄橋上流の多摩川河川敷で催される。

キャンドル1,500～2,000個を使って光の絵を描くほか、ライブ演奏、キャンドル作りのワークショップなどを行う。

# 高い技術で伝統的な木造建築手がける

## 昭和40年に創業／小足立八幡神社の子どもみこしや山車製作

店舗めぐり ◆71◆　大豊工務店

狛江保育園南側にある大豊（だいほう）工務店株式会社（西野川4-11-1）は、伝統的な木造建築を得意とする工務店で、半世紀以上にわたって住宅の建築やリフォームなどを手がけている。

創業者で現社長の富永豊さん（74）は、会社の近くの農家に生まれた。兄が3人いるため母親から職人になるよう勧められ、中学卒業と同時に遠縁にあたる東村山町（現東村山市）の工務店に住み込みで就職した。初めは家の掃除から穴掘りまで新米職人に課せられるさまざまな雑事をこなし、その後、兄弟子や親方から大工としての技術に加え、建築物を完成させるまでの知識を教え込まれた。

5年間の修行を終えて実家に戻ると、すぐに近くの親戚から住宅の建築を頼まれ、ひとりでやり遂げた。棟梁として信用されるには身を固めたほうがいいという周りの勧めで昭和40年に21歳で結婚、同時に「大豊工務店」の看板を掲げた。この頃、狛江町と周辺では茅葺きの住まいを建て替えたり、アパートや貸家を建てる農家が増え、富永さんのもとにも次々と注文が寄せられた。親戚や知人の住宅やアパートだけでなく保育園の新築工事も頼まれるなど仕事が増え、多いときは6人の職人を雇うほどになった。ただ、自分より経験豊富な年上の職人を使うのが難しく、的確な指示が出せるよう勉強を重ね、自分で設計図を描けるまでになった。

開業から数年たった頃、大きな建築物は鉄筋コンクリート造りや鉄骨造りが主流となったため、富永さんも技術を習得してそうした建築物も手がけるとともに、公共工事を受注するようになった。現在も市内の学校の改築などを手がけている。

その後、住宅建築は大手住宅メーカーによるプレハブ建築や、不動産会社などによる建売住宅が主流となり、地域の工務店に直接依頼するケースは大幅に減った。同社も影響を受けたが、伝統的な木造建築の高い技術を駆使して、以前手がけた住宅のリフォームなどに力を入れて顧客の減少を食い止めるなどの努力を続けてきた。また、地元の小足立八幡神社の子どもみこしや山車を製作、その技術力には地域の人から高い信頼が寄せられている。

伝統的な大工道具を手にする富永社長（右）と阿部さん

富永さんは「当社だけではないですが、48年の第一次オイルショックの時は資材が手に入らず苦労しましたが、それ以外は人や仕事に恵まれ50年以上家づくりを続けてこられました。創業当初は、信用を得ることを第一に、利益よりていねいな仕事を心がけ、そうして得た信頼によってお客さんの輪が広がり、公共事業にも参加できるようになりました」と話している。

富永さんは長男が別の道に進んだため、10数年前に同工務店に入社し、現在では右腕とも頼む阿部秀司さん(50)に、同社の将来を託すことにしている。渋谷区幡ケ谷の祖父、父とも大工という家に生まれた阿部さんは「当社は狛江や調布の顧客が多く、リフォームなどの注文が寄せられています。小さな仕事もていねいにこなして、これまで培った歴史と信頼を受け継いでいきたい」と意欲をみせている。

大豊工務店　☎3489-9564　営業時間＝午前8時～午後6時　日曜・祝日休み